

# 震える小さな命

## 児童虐待防止法10年

### 第2部 ㊦

「病院で子供を処分してくれるんですよ?」。

東京都台東区の永寿総合病院の助産師、赤羽育子さん(38)は、ある妊婦の一言が忘れられない。妊婦は30代で第2子を妊娠していたが、育てる意思は皆無。既に中絶も不可能で、結局、出産した男児は乳児院に預けた。

別の30代女性は出産後に子供を置いて突然逃げた。残ったのは出産の証拠を残そうと病院側が撮った、母子一緒に写真だけ。子供を乳児院に渡す際、助産師はただ一枚の「親子の肖像」を手に、

「これしかあげられず、めんね」とつぶやいた。こつした経験から同病院は未熟な母親への危機感が強い。不安を和らげ虐待などのリスクをおさえようと、24時間体制で、退院した母親の電話相談

んなさんに預けて外の空気を吸って」と諭す。赤羽さんは「母として自信を持てるタイミングは人それぞれ。それまで話を聞き、支えてあげる存在が必要」と訴える。厚生労働省の2008年度の児童虐待死亡事例検証報告書によると、加

わいがり家事をこなす母親を求め「母性神話」が根強く、母親を追い詰めている」とみる。「子供はかわいくない。仕事の邪魔」。関東地方の児童養護施設に2年前、当時3歳の女児を預けた40代の女性は職員に

ルマザーで親の支援もなかったのでは」とみる一方、「最初から完璧な母性を持った母親はいない」と付け加える。挫折を経て、母性にたどりついた人もいる。埼玉県白井梓さん(仮名、29)は長男を、

だが、子供が一時保護されたことで白井さんは変わった。1カ月間で趣味の時間を増やして、その後子供を保育園にも入れた。週末には働きにも出て、生きがいを再確認した。第2子出産後は落ち着いていた。

「10歳で母が亡くなり、自分が知らない理想の母親像を求められても無理だった」という。児童相談所に一時保護してもらったことを経て、母親である意味をようやく受け入れられたように白井さんは感じている。

# 理想の子育て「重荷に

## 死亡の6割母加害

言者の約6割が夫の母親(無理心中を除く)だ。虐待の裾野は貧困層などだけでなく普通の家庭にも広がっている。虐待をかけた母親のケアを手掛ける保健師の徳永雅子さんも泣きやまないよ。だ



一時保護してもらった。出産は入籍から1年足らずで「子育ての覚悟を持てていなかった」。授乳のタイミングや、病気の際の対応も知らなかった。一時は罪悪感と苦しさを自殺も考えた。虐待と認められなかったが、結局、児童相談所以外に行くところがなかった。

連載への意見を募集します。日本経済新聞社 社会部(ファクス03・6256・2771、電子メールshakakai@tokyo.nikkei.co.jp)

育児の悩みの電話相談窓口を設置、助産師が24時間対応する(東京都台東区の永寿総合病院)

# 震える小さな命

## 児童虐待防止法10年

### 第2部 ㊦

「優しいお父さんでいいね」。父の同僚が言うたびに苦痛だった。父が手を伸ばしてきたのは小学1年の時。父は夜ごと胸や下半身を触り、車に同乗すれば今度は自分の下半身を触らせた。そのうえ「いやらしいバカな女」とのしり殴った。

千葉県在住の40代女性は成人するまで美父の性的虐待を受けた。だが結婚後21歳で当時の夫に話すまで誰にも打ち明けられずにいた。「みっともなく他人に言えない。口に出したら世界が変わってしまう気がした」

度の児童相談所(児相)への虐待相談4万4211件の約3%だが、専門家は「表面化しない例が多い」と口をそろえる。

親が強く口止めするほか、思春期では性を語るためらいがあり、幼い「どの家も同じと思った」

多い。兵庫県在住の30代女性は、精神の不調から19歳でカウンセリングを受け、記憶が戻った。小学生的6年間、寝室で父の下半身を触らされていたのだ。女性は人間関係がうまく結ばれないなど後遺症もあったが、記憶

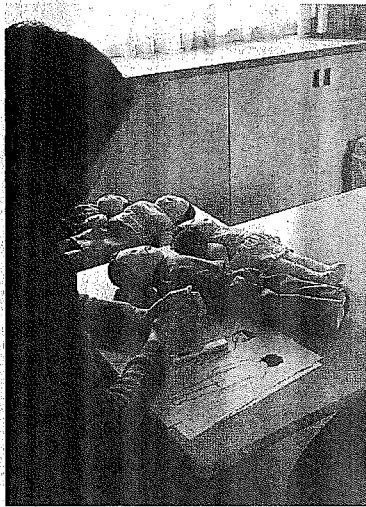
「嫌なことはあった？」「それがあつたの？」。職員が少女に問う。幼児でも被害を説明できるよう、人形や絵を使う。神奈川県中央児童相談所(藤沢市)の「司法面接」だ。司法面接は刑事告発の証拠を得る手段だが、子供がうまく説明できないことも多く、従来は何度も面接を重ね、二次被害を生みかねなかった。同児相は米国を参考に質問

## 密室の性被害

決して父をなじったが、結局一言の謝罪もないまま父は他界した。

児童虐待のうち、子供が最も被害を訴えづらいつとされるのが「性的行為の強要」「ポルノの被害体にする」などの性的虐待だ。発覚件数は、昨年

# タブー意識告白に壁



児童相談所職員が、性的虐待の被害児童との面談で使用する人形(神奈川県藤沢市)

「面接を決め手に、同児相は3人の子供の親を告発。被害者の一人の女子中学生は父親の告発を強く望み、有罪判決を機に、新たな一歩を踏み出そうとしているという。

家庭という密室、性被害というタブーを越えて子供を救う取り組みの模索が続く。

# 傷める小さな命

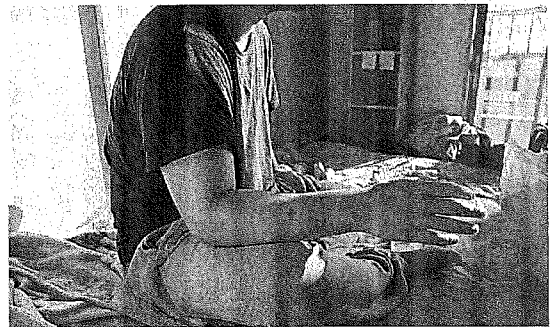
## 児童虐待防止法10年

第2部 ④

児童相談所の虐待相談対応件数が年間4万4千件を超え、当事者の心の悲鳴とどう向き合っていくかが課題となっている。児童虐待防止法施行から10年で救出の取り組みは進むが、深いダメージは子供のその後の人生に影を落とし、守るべき存在を傷つけた親の苦悩も深い。

「おまえなんて生まれて 童養護施設でも、建物に火くると人間じゃなかった」を付けようとし、気付くと。東京都内に住む無職、大下の子供の首を針金で絞田雄一さん(仮名、23)は、初めてのこともあった。お父から投げつけられた言葉、あらがえぬ衝動について大田を背負って生きてきた。さんは「自分で自分のして家庭は複雑で祝福された いることの意味が分からない誕生とは言い難く、理由の かった」と、今も言葉少な分らない暴力を浴び続けた。継父はパチンコで負け 中学を卒業して施設を出た腹いせに何度も殴る。拳 たが、仕事は定まらない。で、時に金属バットで。「大 車上狙いで携帯電話とたば人は気分が殴る。だから学 校で自分も気分が殴った」に入った。「人は誰かの役に立つた あらがえぬ衝動」に生まれくるんだ。小学4年で保護された児 退所を前に生い立ちを振り

# 傷えぬ癒えなくても生き延びても



継父から虐待を受けていた大田さん。生活保護を受け1人で暮らす。「1年後に動いているかは分からない」(東京都内)

じを見たリケームをしたりという日々。現実の一步はまだ重い。生活を変えたいが、今や被虐待経験のある入所児童が7割を超えている。いきなり職員にかみつくと男児、血が出るほど自分の体をひっかく女児。関東地方の情短職員は「大人へのおびえや不信感を持ち、感情が制御できない子が多」と指摘。「安全・安心な生活環境で感情の制御を学ばせ、外で生きてゆける

# 心のゆがみ、人生に影

返るなか、少年院の教官が間の不適切な養育によって、情緒や行動様式にゆがみが生じる」と強調する。養護施設職員や里親による、育て直しや、心理療法の取り組みはあるが、「過去から完全に解放すること

ゆがみを抱えた子供が治療を受ける場の一つが全国

「いつもニコニコしており、一見、虐待を受けたとは思えない子供だった。関東地方の児童相談所の医師は、数年前に保護された

「いつもニコニコしており、一見、虐待を受けたとは思えない子供だった。関東地方の児童相談所の医師は、数年前に保護された

連載への意見募集 日本経済新聞社 編集部 アクア03-62562771 電子メール sha.kan@tokyoinnkei.co.jp